

ペン俳句会 句会報(三四五号)

令和五年六月一日(木)

兼題『紫陽花(あぢさひ)』、席題『夜』

句会を、渋谷区地域交流センター「代々木」にて開催。今回の出席者は十一名(投句は十三名)。

大津 そうかい

時の日の時の抜けがら砂時計

切株に坐せば老鶯間近にす

「夜警」観る運河の街を夏燕

青春は一度限りや鮎遡上

紫陽花や祖霊の気配密かなる

宮原 凧

額紫陽花「星の花火」といふ名札

あおあおと滴をためる四葩(よひら)かな

夜半の雨泰山木の花白し

母の日やアマゾン発の花の籠

梅雨出水一人に余るものを煮て

中村 晃也

厨にて産声を待つ緑の夜

紫陽花やバス停近き理髪店

夜の帳音なく降りて河鹿笛

小糠雨紫陽花重く咲きにけり

ジャスミンの時空に揺らぐ夜風かな

松田 一文字

白壁に沿ひて青濃き七変化

子供らの上から覗く夜店かな

竹林の大きく撓り青嵐

烏賊釣のあかりや遠く二つ三つ

母の日や花に笑顔の母は亡く

新田 ゆふき

水鏡に昼月捉ふあめんぼう

青鷺の首まつすぐに橋の下

青時雨傘一つずつ吸い込まれ

夜嵐に梅の実落ちて朝日燦

あぢさゐのあをきつぼみやのきばかげ

森田 元斐

男衆の復幸市場鯉のぼり

夏暁の海に開ける大鳥居

神ながら訪ねて深き夏木立

紅牡丹仕舞ひのつかぬ夜の雨

紫陽花の招く賑わひ無人駅

首藤 しずを

降る雨や路地の十葉聖きまで

紫陽花や浮かぶ面影みな若き

コンビニのお握りぱりり青葉風

花葵つけ火のやうに燃え上がる

静寂の海に竿さし夜光虫

浜口須美子

ジャスミンの香に酔い過去を手放して

故郷や角曲がるごと濃紫陽花

バラ揺れてわが家素通る郵便バイク

亡母の鼻先に蠅躑躅満開

真夜かけてどくだみの白押し寄せる

長尾 進一郎

代掻きの来ては戻れるトラクター

この路地に夕日射し込み夏来たる

紫陽花に生気の戻り俄雨

短夜や眠れぬままのクラシック

草取りの小一時間が一日に

安藤 晃二

咲き揃い玉を鏤む七変化

石楠花や明治の役場残されて

サツキ散る小道の果てや皐月尽

短夜のしじまへ温き湿気かな

蒼天をわが物にして山法師

内藤まりこ

休日 of 電車待ちをり春祭

額紫陽花に星の縁どり雨の朝

草取りのみみず逃ぐるや指の先

夏の夜は何か居さう闇の中

身をゆすり道をゆくりと蜥蜴かな

高橋 由紀子

白壁に競ひ伝ひて鳶若葉

花ごぎを敷きはいはいの孫を待つ

常夜灯宴の名残りのビール缶

植え終へて花に優しき青時雨

路地裏の細き光に濃紫陽花

西川 知世

構内放送遅延告げをり夜の新樹

黄金週間小さき足跡残し去ぬ

雨含む風紫陽花の稔重く

一合の飯を余らせ初鰹

水滸の夏動かぬ風力発電翼

今回は令和五年七月六日(木)、

兼題は夏の季語「ラムネ」(大津そつかいさん出題)、

席題は西川知世さん出題の「薬」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

ラムネ (冷しラムネ 平野水)

懐かしい飲み物である。私の子供のころは重たいガラス瓶だった。駄菓子屋のおばちゃんがおもむろに木の栓でポンと抜いて手渡されたときには炭酸の泡が手に伝った。当時のことにとってはこれ以上なく美味しく涼しい飲み物で、ご馳走

だったことを思い出す。平野水という傍題は川西市の下平野の湧水がラムネ、サイダー製造に好適だったことによるそう。ポンとガラス玉を抜く音や、氷の上に並べて売られていた縁日や露店は懐かしい。今、ラムネはプラスチックの容器に替わって形は残るがなにか軽々しく感じる。女性のラムネの句は近年編纂された歳時記に多い。仰いで飲む姿はなかなか豪快であり、郷愁を誘う。女性の社会進出と呼応しているのかもしれない。

巡査つと来てラムネ瓶さかしまに

高浜虚子

ラムネ瓶太し九州の崖赤し

西東三鬼

ラムネの酸肺にしみゆく日の青さ

大野林火

ラムネ抜く音の思ひ出三田訪はな

石川桂郎

日本海真向きにラムネ鳴らし飲む

村山故郷

ラムネ店なつかしきもの立ちて飲む

鷹羽狩行

ラムネ壘高だか積まれ北の駅

柏 禎

ラムネ飲む一口づつに玉鳴らし

上田きよ子

取出せぬもの歳月とラムネ玉

太田住子

ラムネ飲む少年逞しのどぼとけ

酒向えみ子

飲み干して海の見えくるラムネ玉

太田住子

ラムネ飲む旅の終りの時間に似

神田ひろみ